

日本人が知るべき親日の歴史（第1回）

ポーランド

「私はポーランドを第二の日本にする」との大統領就任演説を
国民は喝采をもって迎えた



株式会社せおん代表取締役
株式会社テイク・グッド・ケア代表取締役

越 純一郎

日本人が知らねばならない親日国との歴史がある。これは、相手国に対する礼節と理解、日本人の矜持にかかわる問題であり、わが国の安全保障と二国間関係にも、深く、深く関連するものである。

この連載では、日本人として絶対に外すことが許されない重要な親日史の中から、比較的知られていないものを中心に紹介する。

これらが全て先人たちの尊き志と努力によるものであることを、忘れて良いはずがない。我々は、これを知る義務があり、同時代人と後進に伝えることも義務として負っていると思うべきではないか。

ポーランドのような親日国は、またとない。日本の外務省のHPによれば、「ポーランドの国立4大学の日本語専攻の定員は600人、その他に約60の機関や学校で日本語を学ぶ定員は約4,500人」「国中で日本語弁論大会が盛ん」「日本の武道も盛んで、特に空手は同国で6番目の人気スポーツ」。実際に、2018年のワルシャワ大学の日本語専攻の入試の倍率は27倍と超難関だった。

ワルシャワでは、在留日本人の数よりも、和食店の数のほうが多いと現地の人々は笑う。ワルシャワの国立歌劇場で唯一の常任指揮者を、日本人の今村能氏が務めていたこともある。また、日本のポーランド大使館の外交官の多くは日本語が堪能である。

英国留学中の日本人に、ポーランド人の教師が、「自分は親から、『世界のどこかで日本人に出会ったら、できるだけ親切にして恩返しをしてほしい』と言われてきた」と、親身に世話をしてくれたという逸話もある。同様の話は少なくないようだ。

こうしたことの原因は、100年前に遡る。

日露戦争とピウスツキ元帥

日露戦争開戦後の1904年7月、ポーランドからヨゼ

フ・ピウスツキ元帥が訪日し、帝国陸軍と会談したことは、ポーランドでは広く知られている。後年、ピウスツキ元帥は初代国家元首となった

翌1905年、日本がロシアに勝利したことは、100年以上もロシアの圧政下に置かれ、祖国の独立を失っていたポーランドにとって、驚天動地のことであった。東洋の小国と思われていた日本が、ヨーロッパ最大の陸軍国ロシアを破り、バルチック艦隊をも壊滅させたのだ。

1919年、日本ポーランド国交樹立

ロシア革命の混乱の中で、ポーランドは独立を宣言した。その数か月後の1919年3月に、日本はポーランドの独立を承認し、国交を樹立した。同年7月、ワルシャワ大学には日本語科が設置された。

国交100周年の2019年、即位の礼のため訪日されたドゥダ大統領夫人は、「100年前、日本はアジアの国のなかで、最初にポーランドの独立を認めてくれた」と、両国の歴史を踏まえたスピーチをされた。

相手国がこうして日本との歴史に言及するときに、日本側がこれに無知であったら、それは日本人として恥ずかしいことであり、偉大な先人たちに対して申しわけなく、そして相手国にも失礼であろう。

日本によるポーランド孤児のシベリアからの救出

ポーランド独立運動の志士や家族はシベリアに流刑され、1920年には15～20万人ものポーランド人がいた。腸チフスが流行し、親を失った孤児たちは、特に悲惨な状況であった。

折しもシベリア出兵中であった米、英、仏、伊は、ポーランドからの孤児救出要請を拒絶した。だが、最後に要請を受けた日本は、国交樹立の翌年で外交官の交換も未了だったが、17日後には孤児救出を決定し、

日本赤十字社と陸軍が、1920年7月より数次にわたってポーランド孤児756人を日本に救出した。

栄養失調や腸チフスなどで苦しむ孤児たちを、日本は朝野を挙げて温かく迎え、慰問品や寄贈金も次々と贈られ、貞明皇后から4回にわたり資金が下賜された。

健康と朗らかさを回復した孤児の全員は日本の船で無事に祖国ポーランドに帰国した。

その経緯は日本赤十字のHPに詳しいが、ポーランド国内でも良く知られていることは言うまでもない。孤児たちが、日本でいかに優しくされ、癒され、日本の言葉と歌を覚え、忘れぬ暖かい思い出を抱いたかは、今もポーランド人の胸にある。

杉原千畝とポーランド

ポーランド大使館では、戦時中にリトアニア領事であった杉原千畝の写真を展示することがある。「東洋のシンドラ」と呼ばれた杉原千畝が「命のビザ」で救ったユダヤ人たちは、国籍はポーランドだったのだ。その子孫は、現在25万人に上る。

2008年、ポーランド政府は、杉原千畝に対してポーランド復興勲章を授与した（また近年、外交官だった根井三郎の同様の功績も顕彰されるに至った）。

ポーランドを第二の日本に

日本でも良く知られているレフ・ワレサ第二代大統領は、1990年の就任演説で、「このポーランドを『第二の日本』にする」と高らかに述べ、国民はそれを喝采をもって迎えた。

ワレサ政権で、神業のごとき経済改革を断行したバルセロビッチ財務大臣は、1992年頃に日本の戦後復興の調査のために来日し、日本興業銀行（現みずほ銀行）などを訪れている。

戦後、ポーランドはスターリンに支配される一方、日本もマッカーサーに占領された。ところが、日本は2つの原爆というハンディがあったにもかかわらず、戦後19年にして東京オリンピックを実現し、さらに15年後に、ハーバード大学のエズラ・ボーゲル教授は「ジャパン・アズ・ナンバーワン」を出版した。

日本の戦後復興の成功の歴史は、共産体制の崩壊後にテイク・オフを目指すポーランドにとって、驚異の目で見る成功モデルに違いなかったのだ。その日本は、日露戦争、シベリア孤児救出、杉原千畝と、常にポーランドの側に立ち、何らの見返りも求めなかった。

「ポーランド人は恩を忘れない国民である」

と語ったのは、1995年にワルシャワの日本大使館を訪れた、8人のシベリアから救出された孤児の方々

だった。8人は、感涙に咽びながら、アルバムを見せたり、日本でもらった扇子を肌身離さず持っていたことなどと話したという。

阪神淡路大震災後の1996年、被災児30名がポーランドに招かれ、各地で歓待を受けた。帰国前のパーティーには、75年前にシベリアから救出された孤児4名が出席して、日本の震災孤児一人一人にバラの花を渡した。その時、会場は万雷の拍手に包まれたという。

これを伝える兵頭長雄元ポーランド大使の「シベリアからの奇跡の救出劇」（『歴史街道』2014/3）を紹介するサイトは、「シベリア孤児を慈しんだ大和心に、恩を決して忘れないポーランド魂がお返しをしたのである」と結んでいる。

日本が「歴史を忘れる」民族であってはならない

ポーランド人の心には深く日本が刻まれ、日々の中に日本がある。我々のほうがその歴史的背景を知らずしては、日本人の名が泣くではないか。我々が「歴史を忘れる民族」であってはならない。

だから、我々は日本とポーランドの、また他の多くの親日国との歴史にも通じなければならない。それは、我が国の安全保障に寄与し得る重要事である。

次の100年は始まった

2019年11月に、ポーランドの京都と言われるクラクフ市で行われたライフサイエンス・シンポジウムにおけるスピーチを筆者はこう結んだ。

「2019年は、両国の国交樹立100周年である。両国の最初の100年には意味ある歴史があった。同時に2019年は、次の100年の最初の年である。その100年も、同様に意味あるものにしなければならない、我々の叡智と努力によって。」

令和初の皇族の海外訪問は、元年6月の秋篠宮皇嗣、同妃両殿下のポーランドご訪問であった。皇室外交の大きな成果がそこでも示された。

だが、現在、ポーランドで活躍する日本企業は300余社に上る一方で、日本で活躍しているポーランド企業は、事実上、1社だけである。太陽光発電やサイバーセキュリティで、我が国を凌ぐほどの技術水準を有しながら。このことだけでも、課題は大きいと分かる。

日本国民の多くは親日国との歴史をよく知らない。このままでは、日本はまたとない親日国との関係を失いかねない。それは、残念では済まされない、国益上の問題でもあろう。ぜひとも、親日諸国との歴史を、日本人の常識的知識としなければならない。